



彼らのいうとおり、会場を見渡しても、彼らと同じく若い年代がないという点に気がつきました。さらに聞いていくと、「この人、あまり話さないね」「横にいるのに話してこないよ」というのです。会場そのものは、見ていて楽しそうな雰囲気だったのに、各テーブルの一人ひとりの様子を見なかつたと個人的に反省してしまつてしまつた。

私の家の隣りに住むハモンに、このことを良く尋ねてもらつたら、「ホールには大勢

国際交流のチャンスをお大切に

の人がいたね。でも、僕らと同じ若い人がいないね、ここ（月瀧村）に来ているブラジル人の多くは若い人だね、だいたい十五歳から十七歳の人間っぽいね、この若い人は休みの日も学校なの？」というのでした。実際、近い年齢ほど、話しやすく接しやすいたのかと考えます。

部活の関係でアメリカの人と二か月近く練習を一緒にした思い出があります。始めの三日間近くなかなか喋れなかつたことを覚えていますが、それ以後は部活が終つてからの遊びやお互いのお家で友達みんなで騒いだことがとても懐かしく思うとともに、彼らに教わつたことを今でも新鮮に覚えています。今は、半年に一回の手紙でしか彼らに会えません。そのころ彼らがこんなことを話したことがありません。「ここで、一緒に遊んだり、部活したりの思い出だけじゃあつまらない。ここでの友達、帰つてからもずっと友達でいたいね」、このことは私だけじゃあなく同僚みんなが覚えています。このことを思い出したとき、ブラジルの人のいふたことの意味が、何をいふたことかが理解できました。

ちよつとしたことから交流を始めてみませんか

現在、小学校に二人のブラジルの子がいて、今年でもうすぐ二年生。友達は大勢いるし、学校も楽しいと近所のジ

日本の味や風習はいかがでしたか
第2回日伯文化交流会
2月2日(日) 農環センター



▲日本の料理に舌を巻く？

二月二日に行われた、第二回の日伯文化交流会。は、前回の内容とは逆の、日本料理や日本の風習を体験してもらう交流会となりました。

参加したブラジルの人たちの中には、新潟県以外の県から本村に来ている人や、今回初めて日本に来た人たちときまざま、日本料理を知っている人も知らない人も、味わつて楽しんでもらいたい。ま

た、日本の風習を少しでも紹介できた」という趣向を第一に考えたのです。

当日の午前中、就業センターの調理室にブラジルの人たちと村の人たちが集まり、合同の調理が始まる。しかし、緊張しているのはどうも村の人の方？。ことばの違いで普通の日本語もなかなか喋ろうとしなかつた気がしました。確かに、ブラジルの人たちの中には日本語の上手な人はいるものの、各班に分かれてとなるとその中にはまだ上手な人がいないのは当然、それでもブラジルの人たちは「料理が覚えられるから」「スキシンツプだよ、いい機会です」といった感覚が強く、調理が始まれば一生懸命ということばがピッタリでした。こういった場面で、日本人の外人コンプレックスって意外に大きな壁なんだなあと思感させられた。それでも、時間が過ぎると同時にだんだんと笑い顔や楽しい雰囲気が出てきた。このようなことが、各地区の家庭の台所を舞台に行われるようになれば、これ以上すばらしいことはないでしょう。



▶料理をするのは世界みな一緒

午後になると会場の農環センターにぞくぞくと人が集まり、午前中に調理された料理がテーブルを飾る。乾杯とともにその料理に手がつけられると、「おいしいね」の顔があらわらされた。その料理とは、さぞかし見事な高級料理かと思われるでしょうが、料理の正体は、おでん・ぶりの照り焼・巻き寿司などの素朴なものばかりなのです。しかし、日本を代表する料理でいて、それなりに味を追求していけば奥の深いものばかり、日本料理を紹介するうえで十分その役目を果たせたものでし

国際交流の難しさを

また会場では、明日(三日)が節分にあたり、節分を体験してもらつたり、ブラジルのランバダをみんな踊つたりといった楽しい一日となりました。

交流会のとき、取材を兼ねていろいろなことを聞いていたらこんな話ができました。「ねえ、僕たちと同じ、若い人がいない」「家の横、若い人いっぱいいる。こないないね」正直なところハツとする話でした。



▶踊りは得意だよー

原点なのではないでしょうか。今回行われた交流会でも、楽しく料理を作つたみなさんや会場で楽しんだ人の中に、普段の生活の中に、交流の場を設けている人がいるのではないのでしょうか。きっと世界が大きく見えてくることで、心のもち方にも変化が必ずあると思います。ぜひ、これから交流会が行われる機会があるとき、大勢の人の参加をお待ちしています。

今回、いろいろなことを聞かせてくれたハモン(写真左)
「一人でも多くの人々と友達になれば、こんなに最高のことはないね」

